

## 吉四六さんはキリシタン？

安藤 一馬

野津キリシタン記念館（野津町字寺小路……平山喜英氏主管）收藏の『キリシタン類族帳』（野津町大字山頭字田中元田中組大庄屋神野家の古襖の下張より発見された古文書）に、

「本人 野津市村前吉右衛門 孫

野津市村吉右衛門 娘

よし 當午に貳拾四歳

此よし禅宗普現寺旦那

元禄三年午の十二月廿六日に溜水村善六女房に嫁

寛保元年四月廿八日相果普現寺土葬に取置」

と記されてあります。

神学博士マリオ、マレガ師の著書『統豊後切支丹史料』の二六二頁「真本人生帳名付次第（元禄元年……二年）に、

「真本人 市村吉右衛門後家」

と記されてあります。

普現寺の先住原清節和尚の著書『普現寺略史』に、

「當寺壇徒中の人物で奇人乍ら、その最も名声の高いのは俗に吉ヨムと呼ばれる広田吉右衛門であろう。彼の奇矯、頓智に

富んだ数々の逸話は、県下至るところに鳴り響き、野津市といえは吉ヨム、吉ヨムといえは野津市と誰の頭にも連想されるほど、彼は今日偉大な存在となった。……吉ヨムの家は代々襲名したらしいので、今日何代目が逸話の張本人であったかは、本当は究め難いであろう。初代吉ヨム夫婦の古き位牌は今日尚當寺に安置され、その戒名死亡年月日は左の如くである。

実参了義信士 正徳五未十二月二十七日

妙林禅定尼 享保十七子十二月二十六日

と記されてあります。

現代通称吉四六墓といわれる所に建てられてある「吉四六さん顕彰碑」に

「……きつちよむさんは本名を広田吉右衛門という。寛永五年に野津の莊市村今の野津市の農家に生れ正徳五年十二月八十八才で死んだ実参了義信士である……昭和甲午春日中山八幡宮司蒞撰書」と記されてあります。

宮本清氏の著書「吉四六さん物語」（昭和の初め頃発刊）の序文に

「吉四六さんは物語の中に生まれ物語の中に生活し物語の中に死んだ不思議な男である。私は初め吉四六さんの史的事実を根拠としてこの物語の価値を発見しようと試みたが間もなくそれはつまらない企てであり間違。た考である事に気付いた。吉四六さんは史的事実の上では認められていず物語の中に於てこそ始めて事実以上の事実として人々に価値を認められている不思議な男であるという事が判ったからである。……」

#### 参考資料

此の物語を読む前に一通り知って置いて頂きたいこと

……

初代吉四六さんは今から二百五十年ばかり昔の人其後数代襲名してありますので此の物語は決して一人の吉四六さんのものではないのです。

初代吉四六さんの戒名は『実參了義信士』そのお内儀さんの戒名は『妙林禪定尼』吉四六さんは正徳五末十二月廿七日（二百三十年前）に逝きお内儀さんは享保十七子十二月廿六日（百九十五年前）に去った。お内儀さんは吉四六さんの十七年忌の當日夫の跡を慕ったのです。普現寺に保存されている位牌によって此の点は明瞭です。……………

昭和二年一月十八日

寓居にて 著者識

と宮本氏は記されてあります。

『普現寺略史』『吉四六さん顯彰碑』『吉四六さん物語』三者共に、寛永五年（一六二八）に生まれ、正徳五年（一七一五）八十八歳で死んだ吉右衛門さんを、吉右衛門家の初代とし、吉四六さんであると記してありますが、（普現寺略史は後の方で今日何代目が逸話の張本人であったかは、本當は究め難いであろう……）とにごしてありますが、前記の『キリシタン類族帳』によれば、元祿三年（一六九〇）に既に死亡している『前の吉右衛門』さんがあり、『続豊後切支丹史料』によれば、元祿二年（一六八九）に『吉右衛門後家』さんがいたので、寛永五年（一六二八）生まれの吉右衛門さんは此の頃即ち元祿二年と三年には、六十二歳と六十三歳であつた筈であります。

最も信憑性のある史料であります『キリシタン類族帳』と『続豊後切支丹史料』によれば、寛永五年（一六二八）生まれの吉右衛門さんより以前もキリシタン信者の吉右衛門さん夫婦があつたのでありますから、寛永五年生まれの吉右衛門さんを吉右衛門家の初代とし、吉四六さんとする巷説は、信憑性がないということになります。巷説の根拠の資料に甚だ疑問があるのですが、位牌にも墓石にも俗名が記されてありません。殊に位牌の主軸と台座との留め釘が丸釘であることは注目すべきでしょう。尚疑問点について詳しくあげつらうことは本稿では省略致します。

普現寺は、正保四年（一六四七）に、臼杵市月桂寺第四世大安和尚が再建されたものであり、それ迄は無住の廃寺であり、壇徒など無かつたのであります。（此の経緯は普現寺略史に詳しく記されてあります）此の時（正保四年）寛永五年生まれの

吉右衛門さんは二十歳の青年であつたのであります。従つて此の吉右衛門さんが普現寺の壇徒となつたのは、それ以後即ち二十歳以後ということになります。それまで吉右衛門さんは、一体どうしていたでしょうか。

天文二十年（一五五一）豊後の地にキリスト教が伝えられてから、寛永五年生まれの吉右衛門さんが二十歳の頃、正保四年（一六四七）大安和尚によつて普現寺が再建された頃迄は、野津地方ではキリシタン信者が最も多かつた時代で、普現寺の鐘銘に、

『…………豊之後州大野郡野津院者地僻俗薄昔年染邪風背正法嚴尚矣時公禁稍嚴故出魔界入仏界越領主命我之祖翁大安老漢相攸於山家誅除泰棘宮建茅宇號峨嶺山普現寺……時維元祿四辛未秋抄廿九賞……』

とあり、又野津町黍野の了仁寺の鐘銘に、

『正親町院御宇耶蘇宗始來鬚じ而滋蔓于六十州豊州特劇矣吾法於是幾乎息也越數十年將軍家光大驚禁遏蛮宗太敵夫大埜郡野津村是昔魔孽之窟宅寛永乙亥年玄順承郡命來於此居之晝夜以念仏化民其止邪也……寛文第十夷庚歲……』

とあります。野津地方のキリシタン信者の状況が窺えます。又臼杵図書館所蔵の『臼杵藩御会所日記』によりますと、其の數おびただしいものであります。（キリシタン信者名及び人数を整理中）

こゝに最も信憑性ある史料『キリシタン類族帳』の、

『本人（キリシタン信者本人の意）野津市村前吉右衛門』と

『統豊後切支丹史料』に記されてありますところの

『真本人（キリシタン信者本人）市村吉右衛門後家』を再記しまして、本標題の『吉四六さんはキリシタン？』の問題を提供し、これが判定はむしろ読者諸賢の御賢察御想像におまかせ致しましょう。

× × ×

『野津町キリシタン過去史』は措いて『野津町キリシタン現代史』の數頁を飾るべき『野津キリシタン記念館』を簡単に紹

介したいと思ひます。

九州では、天草本渡市の『天草切支丹館』と、長崎市の『日本二十六聖人記念館』と、『野津キリシタン記念館』の三記念館しかありません。然して此の三記念館中、その収蔵品の数量内容に於いて、『野津キリシタン記念館』は、前二館にはるかに勝ると言つても過言ではありません。

主管者平山喜英氏は、私費を投じ独力で建設経営されているのであります。

平山氏は三年前、東京清泉女子大学教授文学博士松田毅一先生の著書『南蛮史料の研究』の一〇五六頁〜一〇五八頁の、元和三年イエズス会土コロロス徴収文書中第十六文書『豊後国野津』に、

『御主てう須の御名譽之為、又何国にても真之証拠頭れん為、豊後之内野津之貴理志且中左之理りを書記す者也

一、此以前之事ハ不申賈、別而將軍様日本貴理志且御法度已後もこんはにやはてれへろはうる様当国ニ耽被成御在宅爰元きりし且中折々被成御見廻こんひさんを聞せられ貴きさからめんと被成御授万以御教化被添御力候事怠り少も無御座候、其上御難儀御辛身難申尽候、其外今一人こんはにやはてれ様御座候か余被成御辛身候故御死去被成候へハ其後又御一人被成御登候、何れも在々所々御廻なされ、てう須の為御譽又きりし且中之合力として、御命を惜れず夜日共ニ被成御辛身(勞)候之事

一、此へるせきさんの後、他門派之出家被成御見廻候へ共頓而御返候事

一、こんはにやはてれ衆爰元御在宅之間ニ御行跡悪き事すかんとらと成事聊も見出し不申候、結句出家之御身持潔き事を見及真実之便を得申候事のミにて御座候事

右之理り真実たる証拠として貴きゑはんせりよニ手をかけ誓紙仕者也、こんはにやはてれ衆依御所望為後日一筆如此

御出世已来千六百十七年

元和参年八月

佐土原喜左衛門

路満

佐土原助作

志門

勘助

如庵

新左衛門

了五

赤嶺惣二郎

安天連

平山宮内

ちにす

平山堅介

まるこす

柳井七郎右衛門

里いの

広田喜左衛門

如庵

龜山右近

ミける

宗波

ミける

孫左衛門

ろうかす』

と記されており、此十二人の代表者中、平山宮内（教名ちにす）さんが、平山喜英氏の教代前の御先祖であることが、平山氏の墓地の供養塔の銘文により判明しましたので平山氏は非常に驚かれ感激し、それ迄日本電建大分支店に勤務されていたのを敢然退職され、『野津キリシタン記念館』建設を決意し、昭和四十二年十二月完成開館、爾来史料記念物蒐集にフアイトを燃やして現在に至ったのであります。幸にも古文書や記念物は日に日に増加して、遂に現館内手狭となり展示しきれなくなり、依って平山氏は記念館を改築し施設の充実を企図していられますのであります。

平山氏の勇断熱意に心から敬意を表すると共に、達成の一日も早からん事を祈念致している次第であります。

（昭和四十四年七月二十四日記す。）